

日本史研究者が史料の英訳から学んだこと

——「日本史史料英訳ワーキングショップ」参加記——

佐藤 雄基
さとう ゆうき

今年六月、「日本史史料英訳ワーキングショップ」がZoomでオンライン開催された。東京大学の支援を受けながら各地で活動を続

けてきた学術団体「歴史家ワーキングショップ」の黄霄龍氏（東京大学大学院経済学研究科）の企画で、イェール大学のボーラ・カーティス氏（日本中世社会経済史）を講師としてお招きした。日本語ネイティブの準備した史料の現代語訳をボーラさんが英訳し、原稿を事前配布された参加者（三〇名弱）が当日議論した。第一回目は「醍醐寺文書」の古文書、第二回目には「御成敗式目」の条文が取り上げられ、専門家の木下竜馬氏とともに私が二回目の現代語訳を担当した。ボーラさんがアメリカ東海岸から参加する都合上、日曜午前の開催となつたが、世界各地から、専門も日本中世史に限らない多彩な参加者を迎えたが、楽しい勉強の場となつた。

現在、日本史研究にも国際的な発信や国際交流が求められる状況が生じている。実際、日本史史料が新しく英訳されることで、海外の（日本学者以外の）歴史研究や世界史教育において日本史の知見が参照される意義も大きいだろう。この点で時宜にかなつた企画だが、今回の経験を通じて、一方的な発信にとどまらない双方向のメリットが日本史研究者にもあることに気づいた。

日本の日本史研究では、史料上の言葉をそのまま本文中で用いたり、「在地」・「地下文書」のように概念用語化することが一般的である。英語圏の日本史研究においても、以前warrior governmentと訳されていた「幕府」を*bakufu*と表記するなど、日本語をイタリック表記で用いる傾向がある。その背景には、近代的概念を中心にしてはめることに禁欲的な現代歴史学の傾向に加えて、正確性を尊重する風潮も大きい。私は「式目」二四条と四一条を担当したが、現代語訳に苦労した。どう訳しても、原文とのニュアンスのズレが生じるからである。史料上の言葉を用いることで、こうした苦労を避けてきたことに気づいた。だが、それによって、言葉や概念の定義を曖昧に済ませてこなかつただろうか。

四一条の「奴婢」をボーラさんは bound servant と訳した。周知のように日本中世の「奴婢」（下人）の性格規定に關しては、日本の史学史上、マルクス主義歴史学の文脈で長い論争がある。このことを考慮して、slave（奴隸）の訳語を避ける意味でも、bound（何か・誰かに縛られている）という幅広い意味の訳語を採用したのだ

ろう。だが、現代に目を向ければ、国際労働機関（ILO）や人権団体は近年、modern slavery（現代の奴隸制）の存在を明らかにしている。誰を読者として、何を議論するために英訳するのかという問題にも関わるが、「奴隸」をめぐる日本史学史固有の文脈を尊重しつつも、こうした新しい問題と切り結ぶために、奴隸（slave）という訳語を積極的に使う戦略もあり得ると思った。

二四条は「後家」の再婚に関する規定であるが、「所領」や「子息」という語をめぐって議論した。「式目」はイギリスの外交官 J・C・ホールによつて一九〇六年に英訳されているが、「所領」は fief (封) と訳されていた。このように、西洋の封建制の言葉が訳語として選択される傾向があつた。戦後のアメリカの日本史研究者は landholdings (所有地) と訳している。だが、鎌倉時代の武士の「所領」は、地頭職のようの一職 (shōeki) という形態をとり、土地そのものとは限らない。そこでボーラさんは思いきつて rights to income (土地からの収益権) と訳した。現代とは「権利」の形態が違うし、その背景にある社会の仕組みも異なる。だが、説明的に長い訳語になつてしまふと、専門家以外にはまったくイメージが伝わらなくなってしまう（この事情は翻訳に限らず、日本人学生に説明するときも同じだが）。さつくりとした訳語を示して、長い注釈をつけるしかないのだろうか。翻訳とは、それ自体比較史の研究成果として正確性が追求されるべきなのか、それとも読者に馴染みのある訳語を提示して、まずイメージをもつてもらうのがよいのか。史料に比べて文学作品の英訳は多く、翻訳自体が一個の文学作品として評価されることもあるらしいが、古典文学の翻訳者はどうして

いるのだろうか。その経験にも学んでみたい。

二四条にみえる「子息」の語をそのまま現代語訳に利用したところ、ボーラさんから「sons と訳してよいのか。女子にも分割相続されていたのではないのか」と質問を受けた。私は目から鱗で、鎌倉時代の「子息」の用例を調べたところ、女子も「子息」と呼ばれる用例があることに気づいた（男子を指す用例が多いが）。結果、「子息」の訳語には sons ではなく children が採用された。ジェンダーの感覚を含めて、現代日本語と地続きのようにみえていた「子息」のような史料上の言葉が、英語によつて新たに光をあてられたようを感じた。

この企画のよさは、ネイティブ言語を異にする研究者たちが直接対話を重ねながら訳語を考えるところにあろう。海外の日本史研究には長い伝統があるため、日本史用語にも一対一対応の定訳が多い。だが、私自身は定訳を知るだけでは、何故この語が定訳になつているのか、日本語とのニュアンスの違いなど、さっぱり分からなかつた。日本語ネイティブにとって、訳語を知ること以上に、訳語の検討を通じて、当たり前だと思っていた自らの日本語の世界と日本語で書かれたヒストリオグラフィーを相対化することのほうが意義深いように感じられた。羽田正氏は日本の歴史学を英語で発信することで、英語にない表現や概念を英語圏に導入して「英語を鍛える」戦略を主張しているが（『新しい世界史』／岩波新書、二〇一一年）、それとともに、日本語ネイティブにとつても、（史料上の言葉を含めた）「日本語を鍛える」効用が史料英訳にあるのだろう。